



経済学部の現状と新たな取り組み

本学経済学部経済学科長 蓬田守弘

本年度4月から経済学部長を務めております蓬田守弘(よもぎだ もりひろ)です。経覧会の皆様からは、経済学部にも多大なるご支援を賜り、誠にありがとうございます。微力ながら経済学部の発展に貢献したいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



今回は経済学部の現状と新たな取り組みについてご紹介します。現在、経済学部の経済学科・経営学科それぞれの入学者定員は1学年165名です。本学部の入学定員は私大の経済・商系学部の中でも小規模ですが、ここ数年の一般入試では、学部全体で約5千名の受験生を集めています。各学科には約15名の専任教員が在籍しており、3・4年次のゼミ(演習)では、教員一人当たり平均して1学年10名前後のゼミ生を受け入れています。ゼミをはじめとして、学生一人一人の顔が見える教育は、入学者定員を少なく抑えているからこそ実現できる特色の一つです。また、学生は他学科の教員が担当するゼミに参加することも可能です。経済と経営の学科間にある垣根を低くすることで、それぞれの学問分野の考え方や幅広い視野を身に着けることができることも、本学部の魅力と言えます。

経済学部の新たな取り組みとして、経済学科は2020年秋に、また、経営学科は2022年秋よりSPSF(Sophia Program for Sustainable Futures)を開設します。SPSFは経済学部の経済・経営の2学科に加えて、文学部新聞学科、総合人間科学部の教育学科・社会学科、そして総合グローバル学部総合グローバル学科の6学科が共同で実施するプログラムです。SPSFはすべての授業を英語で行うことから、国内だけでなく海外からも学生を募集します。これまで上智大学では国際教養学部(かつての比較文化学部)がすべての講義を英語で実施してきました。国際教養学部ではリベラルアーツの教育を重視していますが、SPSFは学科ごとに学生を募集することから、自ら専攻した分野の専門性を高めることに重点が置かれています。

さらにSPSFでは、専門性を高めることに加え、プログラム名となっている「持続可能な未来(Sustainable Futures)」について、プログラムを共同実施する他学科の学生と共に学ぶ機会が用意されています。「持続可能な未来(Sustainable Futures)」には、貧困や環境といった地球規模での課題を解決することなしに、私たちの未来は持続できないとの問題意識が込められています。このような地球規模の課題について、学際的な考え方や分野横断的な議論を通して学ぶことができる、これが異なる6学科が共同で実施する学融合型プログラムSPSFの特色です。

経済学部ではSPSFの開設を見据えた取り組みを行ってきました。例えば、2年生以上の学生を対象に「経済学・経営学 英語特修プログラム」を設置し、専門科目を英語で学ぶ授業を提供しています。現在、このプログラムの講義には留学を目指す学生などが履修していますが、来年度からはSPSFの学生が加わることになります。また、ここ数年、国籍を問わない教員採用を進めてきました。現在、経済学部には外国籍の専任教員が4名在籍しています。

SPSFは、上智大学がこれまでも増して世界に開かれた大学となるための重要な一歩となります。このような国際性の促進は、イエズス会を設立母体とする本学の教育理念に基づいていますが、もう一つ忘れてはならないのは「他者のために、他者とともに」という理念です。これまでも経覧会の皆様から、この理念を実践することの大切さについて、お話を伺う機会がございました。新たな取り組みを実りあるものにするだけでなく、「他者のために、他者とともに」の伝統を守っていくことも、私たちに課せられた役割であると考えています。

経覧会の皆様には、ご指導・ご鞭撻を賜りたく願っております。今後ともご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

転機を味方につけて

山野哲也 (1989 年 経・営)

人生には誰にでも必ず転機があります。単に“運”とも言えるこの機会をポジティブに捉えるか、それともネガティブに捉えるかは自分次第。私は自分の人生のなかの大きな3つの転機で、その後、想像をもしなかった生活形態に変わりました。

■ 第1回目の転機 府中からLAへ

東京都で生まれ、主に府中市で育ちました。国立市にある高校に入学してすぐ、思わぬニュースが飛び込んできました。引っ越しです。しかもロサンジェルス。夏には家族で移住すると。なんの迷いもなく母、弟とともに4人で飛行機に乗り Tom Bradley 国際空港に降り立ちました。片側5車線もあるフリーウェイ、赤信号での右折、海岸沿いには数えきれないほどのサーフィンを積んだピックアップトラックと、目に飛び込んでくるものすべてが新鮮でした。10年生から現地の高校に通い、16歳で自動車免許を取得。高校ではアスレチック(体育会)バレーボールチームに入部し、たくさんの大会に出場しました。夜になると車庫入れに夢中になり、土曜日は日本人学校へ自ら運転して行き、日曜日は愛車の洗車、というルーティーンでした。楽しい車庫入れの延長線上で、いつの間にかスピントーンまでできるようになっていました。運動、勉強、クルマという3軸の生活でした。

■ 第2回目の転機 USC から上智へ

現地の高校を卒業し、USC(南カリフォルニア大学)に入学しました。直後に父に転勤の話が…。このときはドイツでした。父、母、弟はフランクフルトへ移住し、私だけLAダウンタウンのUSC付属のアパートメントに入りました。1年後に家族のもとへ遊びに行き、私は日本に帰ることが決まります。受験した結果、上智大学経済学部2年生に編入することになりました。帰国後は当初体育会バレーボール部へ入部しましたが、「安全運転技術コンテスト」で優勝したことがきっかけで、体育会自動車部に転部。ゼミでは奥田先生のもと、韓国の自動車メーカーの発展ぶりを研究し発表しました。自動車部での活動も好調で、全関東、全日本ともに学生ジムカーナ選手権で個人優勝することができました。体育会からも最優秀選手賞をいただき、いまでも賞状とトロフィーを自宅に飾っています。

クルマ好きが転じ、就職活動はすべて自動車メーカー。本田技研工業への入社が決まりました。開発ドライバーとして「いいクルマを造りたい」という思いがありましたが、なかなか実現できませんでした。しかし週末と有給休暇を最大限利用して、JAFタイトルのかかるジムカーナやレースに参戦しました。1/1000秒を争うモータースポーツでライバルたちと戦うことの繰り返しをしました。

■ 第3回目の転機 サラリーマンからプロレーサーへ

ホンダへ入社してから8年経ったある日、往年のレーサー高橋国光氏からお誘いを受けました。これがきっかけとなりサラリーマンを辞め、プロの世界に入ります。優勝できなければ解雇される、という厳しい環境のなか、アジア最高峰のレース、「SUPER GT」で唯一無二(2019年7月15日現在)の3年連続チャンピオンを獲得しました。「全日本ジムカーナ選手権」でも日本最高の111(同)という優勝回数と19(同)というシリーズチャンピオンの回数を獲得しました。学生時代からの夢だった自動車メーカーやタイヤメーカーのスポーツモデルの開発テストも請け負っています。2015年と2016年は本田技術研究所が試作した4モーターの電動コンセプト





カーの開発ドライバーとして標高 4301m の山を一気に駆け上がるアメリカコロラド州のピクスピークインターナショナルヒルクライムに出場。日本人最速を記録、過去 100 年の同レース史のなかで 4 番目に速いタイムを記録しました。モータージャーナリストやドライビングコーチなどもしており、大好きな“クルマ”と“運転”ということを軸に生活をしています。2018 年、歴代初となる全日本選手権 100 勝を超えたことから、日本自動車連盟から JAF モータースポーツ特別賞を拝受しました。

プロレーサーには“練習”という言葉は存在しません。パワーや重量、駆動方式を問わず、与えられたクルマを天候、気温、場所など与えられた環境で、走り始めた瞬間からベストタイムを刻むのが仕事です。近年では車両に搭載するデータロガーで、

どんな速度のときに、どんな操作を、どれほどの時間でしているのかもすべて記録され、比較されます。そんなプレッシャーのなかでも、クルマと運転というものに囲まれ、この世界で生きていることに言葉では表現できないほど満足しています。

3つの大きな転機を味方に、上智大学時代に発見できた自分自身の得意分野をそのまま生活の糧になれる日々を幸せに思い、開眼させてくれた上智大学と、この大学出身のレーシングドライバーとして存在していることを誇りに思います。

(レーシングドライバー、
有限会社ドライビングマジック 代表取締役社長)

(画像提供:株式会社エクセディ、平田勝、山内真理)



経鶯会歌舞伎鑑賞のタベ

秋葉 哲 (1967 年 経・経)

もう恒例行事になった経鶯会歌舞伎鑑賞会、今年も梅雨空の中 12 名が国立劇場で観劇しました。煩雑な幹事のお役目を引き受けてくださる大武宏至さんに感謝申し上げます。

終演後の和やかな一献の席で印象に残った役者を聞いた処、大方が若手坂東新悟を推しました。皆の観る眼は同じです。大衆人気はこうして沸いてくるのだと実感しました。私も初めて観た役者でした。器量良し、声良し、姿良しです。開演後 30 分ほどの歌舞伎の説明を受け持ちましたが、それが爽やかだったのも好印象に繋がりました。父上坂東彌十郎は長身ですが新悟も背が高い。故坂東三津五郎のご子息巳之助と共演して評判が良いそうです。大和屋さん一門の女形代表は坂東玉三郎ですが、若手後輩をぜひ厳しく温かくご指導を

願います。

芝居は 40 歳半ばに差し掛かり、役者として重責を担う立場になった尾上松緑が座頭格で引っ張ります。先ず義太夫歌舞伎「菅原伝授手習鑑」から荒事の様式美を堪能できる「車引」でお祖父様が得意にした役に挑みました。松緑のご子息左近が登場してくれましたから、私は親子曾孫まで四代の「車引」を観ることが出来ました。10 年後位には二代目松緑の面影をご当代で観ることができるでしょう。この芝居で唯一華やかな色彩りと型を見せる一幕を皆が丁寧に演じ、ヴェテラン中村松江が品格高く締めました。

続いて抱腹絶倒もの名狂言「棒しばり」、役者が両手を縛られ不自由な姿勢のまま、数々の動きを舞踊で見せるサービス精神に溢れた芝居です。

松緑は肩の上に6尺近い長さの棒を通し両端各々手を縛られます。もう一人は両腕を後ろ手に縛られます。主人の外出中に盗み酒を繰り返すので懲らしめのためです。二人はやはり甕から何とかして酒を酌み飲もうとします。棒が邪魔して酒を酌むのに苦労するわ、酌んでも咽喉を通すまでまた一苦労と、所作をすべて舞踊で進めます。松緑は舞踊藤間流の家元勘右衛門だからお手のもの、軽やかに広々と舞台空間を酔いが廻るにつれおおらかに楽しくなる推移を踊ります。両肩両手を長い棒で縛られ身動きが不自由でありながら悠々踊ります。お祖父様、40歳で急逝した父辰之助も拍手喝采したことでしょう。相方を勤める坂東亀蔵も澁漕として松緑と呼吸を合わせていました。同じ音羽屋一門、これから息が合った芝居が楽しめそうです。

午後6時半開演の社会人向け興行はほぼ満席、皆さんゆったり楽しんでいる感じでした。

毎月のように懸かる大歌舞伎ではなかなか観る

ことができない中堅若手役者の日頃の地道な研鑽を拝見できるのは嬉しいことです。新春浅草歌舞伎のほか年一回位、国立劇場の企画で中堅若手歌舞伎を観たいものです。

国立劇場の楽しみは二階ロビーに展示されている日本絵画を拝見できることです。有名な東山魁夷の「雪原譜」は此处にあります。川端龍子、橋本明治、鍋木清方、小倉遊亀等々、日本が誇る画伯が描いた幾つもの名絵画を贅沢に楽しめます。ロビー中央で観客を出迎える平櫛田中作「鏡獅子」の彫刻の迫力は言うまでもありません。



文章が長すぎる

加藤秀雄 (1973年 経・営)



長年、日本経済新聞の記者をしてきた者として、ここ数年腹立たしいことがある。それはインターネットやスマートフォンを通して送られて来る文章の中に「長過ぎる」と感じるものが多いことだ。

画面をスクロールさせればいくらでもスペースが生まれるから、これでもかというほど駄文を書き連ねる。新聞では、「この囲み記事は120行（私の現役時代は1行15字、現在は13字＝日本経済新聞の場合）」とか決まっていたし、「アタマ記事（各面のトップ記事）でも60行以内」と教えられた。紙面の広さに限りがあるから、いかにコンパクトに文章を書くかが大事だった。それが今は新聞でも、1面の囲みスペースだけでは書き切れず、「3面に続

く」などとやっているのだからあきれるばかりだ。

本来、文章は「10知って8書く」のが良いとされる。知っていること、書きたいことが10あっても8にとどめる。そうすると残りの2の部分で、「筆者はもっと知っているな。書きたいことがあるのだな」といった余韻が生まれる。10知って12書けば、2の部分は捏造か、事実と自分の意見を混ぜていることになる。

私は、いかにも「自分はこれだけ知っているのだ」とばかり、てんこ盛りにした文章に出会うと、「ばーか」と毒づいて、途中で読むのを止めることにしている。

確かに近年は「5G」だ「CASE」だなどと、かなり詳しく説明をしなければいけない言葉が多くなっている。ただ、これらの説明を本文の中ですると文章が長くなってしまうのなら、用語解説を脚注に出すなど、本文を圧縮するようにしたほうが良いだろう。何しろ文章はコンパクトに書く

ことが一番だ。

最近テレビを見ていて、長い文章と同じ類の出来事に気が付いた。それは出来の悪い人間、悪い奴ほどよくしゃべるとのことだ。刑期が確定したのに収監から逃げた人間と、ドキュメンタリーの形でやっていた結婚詐欺師の、いずれも肉声を聞いた時のことだ。

よく言えば立て板に水というか饒舌というか、よくこれだけあることないことをしゃべると、あきれるばかりだった。相手が何か言おうとしても、それにかぶせるように、自分の主張(?)を繰り返す。二人に共通しているのは中身がほとんど

ないこと、最後に自分が言っていることが通らなくなると、一転して恫喝に変わることだった。

この二人の話を聞いていて、「どこかで見たような気がする」と感じ、テレビの国会中継やニュースの場面を思い出した。野党議員が限られた時間の中で質問しているのに、長々と中身がない(または中身を膨らませた)答弁をして、相手の質問時間を使ってしまう、どこかの国の総理大臣の姿だった。

長い文章と饒舌は、決して褒められたものではない。そういうことを弄する相手には気を付けなければいけない。

アートで生きる

安達ロベルト (安達伸幸 1993年 法・国)

私が卒業したのは93年、バブルがはじけて、女子の就職が厳しくなった最初の学年でした。

履修していた国際組織法ゼミの石本泰雄先生は、就職活動を理由に欠席することを禁止していました。毎回全員が出席していますから、ゼミの合間にいろんな話が飛び交います。やはり就職活動の話が中心でした。

「おれさ、A社とB社(どちらも大手広告代理店)から内定もらって、迷ってんだよね。」
「おれはやっぱC出版かな。」

前年まで上智の女子と言えばバンバン内定をもらっていたのに、自分たちの番になったら急に冷遇を受ける女子の、男子に対する嫉妬たるや。あるとき廊下で聞こえてきました。

「なによ、〇〇くんたち。私なんてまだひとつも内定もらってないのに!」
「最低よね。」

そんななか私は、就職活動を一切せず、作曲家に弟子入りしたのでした。

今振り返れば、単なる大馬鹿野郎です。もし目の前に当時の自分がいたらこう言うでしょう。「やめろ。地獄を見るぞ。」

当時の私には根拠のない自信がありました。憧れのエンニオ・モリコーネや坂本龍一さんのような映画音楽をつくれるようになると、1ミリも疑わなかったのです。

情報をかき集め、独学で作曲を始めましたが、オーケストラ曲を書くには限界を感じ、月謝をアルバイトで稼いで、4年生の後半に弟子入りました。

通い始めてすぐ、その根拠のない自信には、本当に根拠がなかったと悟りました。

22歳で始めたピアノは、先生が途中で沈黙してしまうレベル(沈黙がいちばん怖いことをこのとき学びました)。また、クラシックを聞いてこなかったもので、西洋音楽の構造を体感として分かっていません。

卒業直後の4月1日、たまたま通りかかった千鳥ヶ淵でピカピカのスーツを着ながら花見する新社会人たちを見て、初めて不安というものが心に湧いてきました。はたして私の選択は正しかったのだろうか。この先、生きていけるのだろうか。職業を勝ち得て談笑する者と、まだ何も得ていないどころかマイナス地点にいる者の対比。

そこから、不安との闘い、マイナスをプラスにするための日々が続きました。

アルバイトをしながらの修行生活。もともと器用でないので、アルバイトに熱中すれば曲は書けず、作曲に集中すればお金がなくなります。

当時はいい音楽を聴くには、お金を払って生か^{なま}CDで聴くしかありませんでした。楽譜、機材、



スタジオ代も必要です。演奏を頼めばギャラも払います。経済的などん底を幾度となく経験してきました。

一方で、若気の至りとは素晴らしいものでした。ダメもとで送ったデモテープが採用され、ヘタクソなピアノがばれないように必死に練習して演奏しました。次第に劇団やダンスカンパニーから曲を依頼されるようにもなりました。失敗は数えきれないほどしましたが、あなたの曲が好きだと応援してくださる声が励みでした。

ひとつの大きな思い出が、1999年に上智大学の学生NGOめぐこが主催したチャリティコンサートです。上智のOBオーケストラ「ディマンシュ」にプロが加わった寄せ集めオーケストラと自作曲を弾きました。

その日会場は不思議なエネルギーに満ちていました。ある曲を弾いたとき、人生で初めて「走馬灯」を体験しました。ピアノを弾きながら、作曲を志してからその時まで経験したことが、次々に脳裏に映し出されたのです。

演奏後、60代くらいの男性が話しかけてきました。「あなたの曲を聴いて、生まれて初めて音楽で涙を流しました。」

私自身がそうであったように、音楽には人生を変える力があることを、あらためて教わったのです。

作家としての転機は、32歳で写真を始めたときでしょう。音楽でした苦労がうそのように、写真ではすぐにお仕事をいただくようになりました。今では写真展はもちろん（経済学部卒の桑原清幸さんのギャラリーKKAGでも個展をさせていただきました）、雑誌、カメラメーカーの仕事なども多く手がけています。

10代から20代初めにかけて盛んにやっていた絵画にも、昨年あたりから再び力を入れています。今年は水彩画の個展をやりました。

音楽では、クラシックの要素をベースにしながら



らも、これもやはり10代の頃に熱中して聴いていた電子音楽を積極的に取り入れるようになりました。ライブも頻繁にやっています。

もし私に才能があるとすれば「しぶとい」ということでしょう。継続は力なりなどという耳障りのいい話ではありません。絶対にできるはず—そう信じて愚直に続けてきました。

当初の映画音楽の作曲家という夢からスピンアウトして、今はいろんなジャンルで活動しています。アートで生きていること、アートで社会に貢献できていることは本当に幸せです。

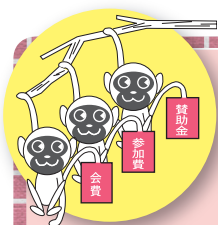
夏休み前の学生のように、やりたいことがたくさんありすぎる人生。心はまだ学生の頃のままのようです。

オフィシャルサイト

www.robortadachi.com

安達ロベルト ライヴ情報：

2019/8/20(火) 南青山マンダラにて実施しました



—「年会費納入」・「エコノミアンへの投稿」のお願い—

当会は経済学部同窓会として組織され、大学創立100周年を経過して、いまや当学部卒業生（当会会員）の数は1万人をはるかに超えています。

エコノミアンはそれらの会員の会報として相互の消息を伝え、交流の一端を担うべく、担当役員によって編集されています。「会報をもっとおもしろく」「総会で久し振りに会った」「大学の発展ぶりに目を見張った」「役員でお手伝いをしたい」などなど、感想や要望が当編集部には寄せられています。担当役員も手弁当で四谷に出かけ、会報や行事を少しでも「充実」したいと張り切っています。

会報はみなさまの年会費3,000円で作られています。また、「研究奨励金」は大学募金室を通じて経済学部へ寄付され、学生をサポートします。同封の「〒払込取扱票」を使用してご送金をお願いいたします。振込手数料はかかりません。みなさまの「声」をエコノミアン誌面に反映させてください。秋の総会にもぜひ、遊びに来てください。お待ちしております。

柴又散策

大宅一裕 (1973 年 外・独) (香港在住)

映画『男はつらいよ』第1作は1969年上映ということなので、僕が大学に入学した年ということになります。

そういえばその当時の彼女と渋谷の映画館で何作目かを観て笑い転げたことを思い出しました。

その後すっかり寅さんファンになり映画館、テレビそして40年前から海外在住となってもレンタルビデオや移動の飛行機の機内でおそらく全作品の半分以上は観ているのではないかと思います。その舞台となる葛飾柴又を訪れる機会は今までなく、いつか是非行ってみたいと気になっていたところ、今年4月縁あって大学同窓で柴又ご出身の鈴木孝さん、田村隆さんから柴又散策ツアーをお誘いいただき、同じく上智留学を終え現在航空会社でCAをやっているタイ人のフェーンちゃんと夫婦一緒にチャンス到来と思い参加させていただきました。

京成線を乗り継いで降りた柴又駅前にある寅さん、さくらの像に迎えられ、街は映画のセットのような昭和レトロの面影のある世界。団子屋からおいちゃんやおばちゃん、さくらの声が聞こえてきそうな参道の商店街を抜けるとそこは帝釈天、どうしても笠智衆の御前様や佐藤蛾次郎の源公の姿が浮かんできます。

柴又帝釈天は江戸時代前期(1929年)開創の日蓮宗寺院。建物は彩色を施さない素木造のため一見地味に見えるが細部は見事な彫刻で装飾され、中でも檀家である鈴木さんに案内していただいた彫刻ギャラリーにある法華経説話を浮き彫りにした10面の彫刻絵巻は、当時の彫刻家の高度な匠の

技を感じられる圧巻でした。

ランチは250年の歴史を持つ川千屋でのうな重。ビールに加え店の主人から差し入れの日本酒もあり昼からすっかりいい気持ちになり午後の散策開始。

午後訪れた寅さん記念館、寅さんが全国を放浪の後必ず帰ってくる柴又の団子屋のセットをそのまま再現し、撮影に使った台本、小道具、山田監督のデッキチュアまで展示してあり、もう一度ゆっくり来てみたい記念館でしたが、団子屋の名前が映画の「とらや」でなく「くるまや」になっているのはどうしてなのでしょうね? どなたか教えてください。

次に訪れたのは昭和初期に建造された日本式書院造に西洋建築を取り入れた大豪邸山本亭。建てられた故山本栄之助氏は金属塑性加工工場を経営されていたとのこと。おそらく昭和初期軍需産業の下請けで財をなされたのではと勝手な想像をめぐらしてしまいました。矢切の渡しを見ながら荒川土手を川風に吹かれながらそぞろ歩きし散策ツアー最後のメは寅さん映画撮影時の写真が多数飾ってある高木屋老舗の名物団子で。

地元の鈴木さん、田村さんの綿密な準備のお陰で充実した柴又の休日を過ごさせていただきました。日本人の我々のみならず、タイ人のフェーンちゃん、中国人留学生たちにとっても古き良き東京の下町文化を体験できた思い出ツアーとなりました。あれからしばらくしてフェーンちゃんから勤務飛行先のパリからメールがあり、早速DVDで寅さん映画を見始めてすっかりハマってしまっているとのこと。あらためてお世話いただいた鈴木さん、田村さんに厚く御礼申し上げます。



経鷲会だより

～今後の経鷲会の主催行事について～

☆経鷲会年次総会・懇親会が開催されます。

日 時：2019年11月16日（土）13時～

会 場：大学6号館301教室（ソフィアタワー）

式次第：13：00～13：30 代議員会・総会

13：30～13：40 経鷲会今後の抱負 会長 田村隆

13：40～14：20 講話「経済学部の今」（仮題） 学部長 蓬田守弘

14：20～15：00 講演「これからの日本」（仮題）

双日総研チーフエコノミスト 吉崎達彦氏（予定）

懇親会：15：10～17：00

会 場：大学2号館教職員食堂

来 賓：佐久間勤理事長（予定）、暉道佳明学長（予定）、戸川ソフィア会会長

☆スペシャルオリンピック協賛、経鷲会ゴルフコンペを開催いたします。

日 時：2019年10月21日（月）

会 場：程ヶ谷カントリークラブ

☆経鷲会女子部第4回勉強会開催のお知らせ

テーマ「イギリスの紅茶文化とライフスタイル」

講 師：宮脇樹里氏

日 時：2019年11月23日（土、勤労感謝の日）13：30開始

会 場：上智大学13号館304教室（正門前を南進、旧福田家ビル）

参加費：無料

申込み：福田順子 jfukuda1308@ybb.ne.jp

エコノミアン編集雑記

ソフィアの鷲3

東京生まれで四ツ谷育ちの筆者は、子供の頃から上智大学の校章を目にする機会がありました。高校へ進学し、理系か文系か進路に悩みつつ大学受験を迎える頃には、難しい漢字の変形や交差するペンを摸した大学の校章もさることながら、中世の騎士を連想する異国情緒漂う鷲のシンボルに、いつの間にか憧れるようになっていたことを思い出します。グーグルなどで「上智大学の鷲」と検索すると「校名の由来、校章・校旗、スクールカラー・校歌」という以下のサイトに遭遇します。

https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/itd24t0000000d7f-att/websophia41.pdf

その中に、『鷲は太陽をめざしてまっしぐらに飛ぶ勇猛果敢な鳥であり、校章は、真理の光を追い求める鷲の姿を象徴していることになる。』という記述がありました。しかし、なぜ鷲を校章に選んだのかについての記述はありません。筆者の想像では、上智大学はドイツのカトリック教会の信者たちによる献金で創立された大学であると聞いているので、19世紀半ばにプロイセン王国の皇帝のシンボルとして、また現在に至るまでもドイツの象徴として用いられている鷲（写真1）が、校章のデザインのヒントとなって採用されたのではない



写真1
プロイセンの鷲

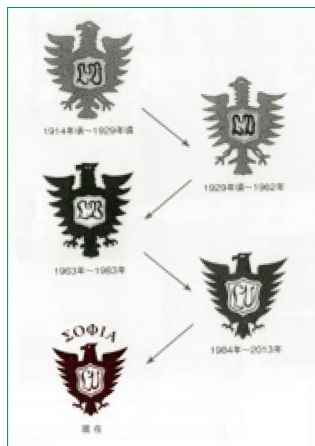


写真2 鷲のデザインの変遷



写真3 筆者の「ソフィアの鷲」

かと思います。上述のサイトには上智大学の校章である鷲のデザインの変遷（写真2）が紹介されています。この変遷の図を見て、思わず筆者の手元にあるソフィアの鷲を写真に撮ってみました（写真3）。一番上の銀のタイピンは大先輩から譲り受けたもの。2段目の青い鷲のバッジは、その昔、筆者が学生服の襟に付けていたものです。最近では上智に限らず大学生が校章を身につけている姿をほとんど見るのがなくなりましたが、大学を卒業して社会の荒波に揉まれ、何年も経つと母校の校章「ソフィアの鷲」が、不思議に自分のアイデンティティーの源と感じ、ソフィア会活動のお手伝いで母校の門をくぐる回数が増えました。

戸川 清（1971年 経・経）